



- ①よさを伸ばし合う子ども
- ②つながりを大切にする子ども
- ③自らとふるさとを拓く子ども



1年間よくがんばりました!! ~令和6年度 修了式~

3月21日(金)、修了式があり、各学年の代表者が修了証書を受け取りました。

新しい学年に向けて、春休み中にしっかりと目標を定めてほしいと思います。そして4月4日の新学期からは、今よりもう少し大きい自分になるために、何事にも前向きに取り組むことを期待しています。みんなでよりよい八森小学校をつくってください。

これまで、ご支援・ご協力いただきました保護者の皆様に感謝します。無事に1年間を終えることができました。

来年度も子どもたちが自己の可能性を伸ばし、将来の夢に向かって前向きに歩んでいけるよう支援していきたいと考えております。来年度も引き続きよろしくお願いいたします。

＜今後の主な行事予定＞

- 3月22日(土) 春季休業日
- ~4月3日(木)
- 3月28日(金) 離任式
- 4月4日(金) 1学期始業式・新任式
- 4月7日(月) 入学式
- 4月17日(木) 全国学力・学習状況調査
- 4月18日(金) P T A 授業参観・総会
- 4月29日(火) 昭和の日



つたき 出合いの意味

最近ハマっているテレビ番組「ドキュメント72時間」です。毎回、ひとつの現場にカメラを据え、何気ない日常にフォーカスし、そこに生きる人たちの決して作りものではないリアルな生き様を描き出しています。2月28日の放送は、「奥能登・珠洲 海辺の銭湯」でした。

震災直後、いち早く営業を再開した海辺の銭湯。風呂を沸かす燃料は、皮肉にも解体された家の廃材でしたが、地元民だけでなく、ボランティアや解体業者たちの心のよりどころとなっていました。

私が特に印象に残ったのは、解体業者として県外から来ている若い男性でした。上半身の広範囲に入れ墨があり、一見、いかつい感じでしたが、銭湯にやってくる子どもたちのために漫画を寄贈。大阪の児童養護施設で育った彼は、この銭湯での地元民との交流を通して、珠洲市に住むことを決意します。二人の小さな娘さんを早く連れてきたいと話す姿に、この先、幸せな生活を送ってほしいと思いました。偶然出会った人たちがそれぞれに歴史があり、生き方も価値観も様々です。しかし、共通しているのは、人との繋がりを大切にしているということです。復興にはまだ程遠い奥能登ですが、温かな心の交流は、様々な立場にある人たちの生きる力になっていると思います。

私たちも日々、様々な人とすれ違っています。おそらく、そのまま通り過ぎてしまう人がほとんどだと思いますが、偶然の出会いが人生を変える機会となるかもしれません。4月から新学年となり、新しい出会いが待っています。その出会いは人生において大きな意味をもつものになるかもしれません。ぜひ様々な場面で周囲の人と積極的な関わりをもってほしいと思います。



日本の世界自然遺産5地域に暮らす「こども作文コンクール」

～町代表として、小林青羽さん（6年）の作品が選ばれる！！～

これは、2025年6月に開催される「大阪・関西万博」に合わせて、世界自然遺産5地域（知床、白神山地、小笠原諸島、屋久島、奄美・沖縄）の23市町村に暮らす子どもたちを対象にした作文コンクールです。

白神山地に関しては、一次選考として各市町村で代表作品を選出し、最終選考で秋田県、青森県の7市町村（八峰町、藤里町、能代市、弘前市、西目屋村、鰺ヶ沢町、深浦町）の代表作品の中から、地域別代表作品1点が選ばれ、6月5日に大阪・関西万博会場にて作品発表と授賞式が行われます。

2月の一次選考では、八峰町代表作品として小林青羽さん（6年）の作品が選ばれました。おめでとうございます。

代表作品決定は3月末です。選ばれるとよいですね。



「知」の継承

八峰町立八森小学校 6年 小林 青羽

「これは熊のつめあとだよ、見える？」

ガイドさんがブナの木の手をつえて指した。するどいもので深く幹をけずったあとが見える。

ぼくの学校、八森小学校から車で20分ほどのところにある白神山地の『留山』。昔から大切に守られてきた里山で、樹齢300年以上のブナやミズナラの巨木を見ることができる。『留山』の名称は、江戸時代から木を切らずに留めてきたことに由来し、森を守るため、現在はガイド同伴でなければ入ることができない貴重な場所だ。ぼくたちは学校のジオサイト学習で何度か足を踏み入れている。

「熊が何を食べているか知ってる？」

いきなりガイドさんに聞かれ、戸惑った。熊はどうもうなイメージだから、

「肉ですか。」

と答えると、キョロキョロとあたりを見回すガイドさん。

「ああ、あった、あった。熊はこれが好きなんだよ。」

ガイドさんがつまみ上げたもの。どんぐりほどの大きさで、皮が4つに分裂し、まるでチューリップの花のよう。それは、ブナの実の殻だった。殻は開いてしまっていて、実はなかったが、こんな小さなものを食べていることに驚いた。

「今年はブナの実がとっても少ないんだよ。熊が町にも出るかもなあ。」

そのときは何気なく聞いていたが、実際、この年は、秋口から熊が町のあちらこちらに出没し、柿の実を食い散らかしたり、畑をうろうろしたりして、後からガイドさんの言葉を思い出し、驚いたことを覚えている。

夏に訪れたときは雨天だった。

「黒いすじが見える？」

ガイドさんが叫んだ。それは、樹幹流。

「雨の日しか見られない、特別なものだよ。」ブナの幹をつたう黒いすじが、根元へとまっすぐに流れ落ちていく。ブナからのたくさんの栄養分を含んだ雨水が、この山の土を潤しているのを目にすることができた。レインコートの中が蒸れて、ちょっと不快な気分になっていたが、それも忘れて樹幹流に目を奪われていた。

ぼくたちの人生はたった100年ほど。だから、自然の移り変わりのほんの少ししか見ることができない。木が枯れて倒れたり、葉が落ちたりすると、少しさみしい気がする。でも、それによって、小さな木に光が差し、落ち葉が栄養になる。そうした営みが、気の遠くなるような長い年月繰り返されてきて、今、貴重な森の豊かさをぼくたちは目にすることができている。この奇跡に感謝したい。

動植物が互いに支え合いながら共生している白神山地。いつも見ているふるさとの景色が特別なものだということを、たくさんの人に伝えていきたい。



たのグ春の元ラウをもう気ウンをすなンドを思わす声からせが響く陽気の中、春本番です。子どもたち

今週の一枚

明日から春季休業日です。春はスピードを出して走る自動車も多く見られます。また、子どもたちも活動的になり、外での活動が多くなります。

安全な生活についてご家庭でも話し合い、気を配ってください。

